



朝日子だより

社会人編 Vol.12



吉田高校の皆さんへ

私の経験が皆さんの役に立てたら幸いです。

渡辺 諒 (平成14年度卒)

毎日新聞科学環境部 記者

東京農工大学・農学部・環境資源科学科卒業

仕事の内容

私

は全国紙である毎日新聞の記者をしています。2008年4月に入社し、現在6年目です。入社してから5年間は長野県にある、松本支局と長野支局に勤務し、長野県内で起きた事件や選挙、行政の仕事などを取材して記事を書きました。今年4月からは東京本社の科学環境部



に配属となり、科学に関係する事柄を取材しています。記者は文系の仕事と思われるかも知れませんが、理系出身の人たちも結構います。もちろん圧倒的多数は文系の人たちですが。

記者は、世の中のありとあらゆる事柄を取材して、記事にするのが仕事です。特に重要なのは、世の中の人々が知らない問題を掘り起こしたり、権力を持った政治家たちといった人たちが、その権力を乱用していないかなどといったことに目を光らせてたりすることです。また、科学環境部では、物理や化学、医療など様々な分野の新しい研究成果を、記事を通じて紹介するほか、科学的な視点から国の政策などが正しい方向に向かっているかをチェックしています。

長野県内で取材をし、心に残っている2つの事柄を紹介します。まず一つ目は、全国に150頭ほどしかおらず、絶滅の恐れのある、在来馬「木曾馬」についてです。当時、150頭のうち多くの木曾馬が飼育されている長野県木曾町では、絶滅させないための方策に頭を悩ませていました。実は木曾馬は、戦時中に体が小さくて温かな性格があだとなり、国から交配が禁止され、数が激減した歴史があります。戦後、奇跡的に残っていた馬から繁殖を再開したため、遺伝子的に偏りがあるといった問題が生じてきました。そこで木曾町は私が長野で記者をしている時に保存に向けた研究をスタートさせたのですが、そのことを全国の読者に伝える必要性は高いと思い、記事を書きました。木曾馬の歴史や現在でも自宅で飼育している人の思いなどを取材し、連載記事も書きました。



もう一つは、ニホンジカによる食害問題をテーマにした記事をいくつも書きました。山梨県でも問題になっているかと思いますが、現在、ニホンジカが全国で爆発的に増え、農作物や森林、自然環境に大きなインパクトを与えています。その現状や対策についての話題を追いかけていました。長野では、農林業に年間15億円もの被害があり、金額では表せない希少な高山植物を絶滅させてしまうという悲惨な状況もあります。シカが増えている

理由はいろいろと考えられるのですが、大きな要因として生態系の崩壊を挙げることができるでしょう。まだまだ解決しない問題ですが、記事を通じて読者の理解を深め、いろいろな人が協力して解決策を考えることが大切だと信じています。

今年の4月から勤務している科学環境部では、私の担当は地震や火山、宇宙、天文などです。地震が発生するメカニズムや、星についての記事などを書いています。まだまだ満足のいく記事は書けていませんが、毎日新聞は記事に署名が入っています。私の名前の記事を見かけたら、是非読んでみてください。



職場の様子



「記

者は不規則な職業でしょう」とよく言われます。これはその通りで、事件が発生すると朝も夜もなく取材が続きます。長野県白馬村で大きな雪崩による事故があった時には、私は事故を察知した夕方4時ごろ、現場に着の身着のまま向かい、自宅に帰ったのは翌々日の夜だったという事もありました。もちろん、合間合間には休んでいますが、なかなか辛い取材でした。

職場には机があります。しかし、記者は人に会って話を聞くことが仕事ですから、机に座っていることは少ないです。特に最近は携帯電話やノートパソコンといった機器が発展し、何処にいても記事を送ることができ、連絡も取れます。ですから、会社にいることは少なくし、フットワークの軽い記者が求められていると思います。先輩から「昔は10円玉を何枚も持ち歩き、公衆電話の位置を確認するのが現場について、最初のことだった」と聞いたことがあります。今は恵まれた環境だと思います。さらに、ノートパソコンがない時代には、電話で記事をそらんじたり、会社に戻って記事を手書きしたりしていました。いつの時代なのかは分かりませんが、伝書鳩が記事の輸送に活躍した時代もあるそうで、社屋には鳩のモニュメントが今でもありますよ。



就職前と就職後の印象の差

就

職前には、どんなに不規則で休みがないものかと戦々恐々としていましたが、実際には大きな事件などが無い限りには、そこまで不規則と言うことはありません。しかし、夜は比較的遅いことが多く、体力勝負という面は大きいです。それでもその苦勞を度外視させてくれることは多いです。

それは、新聞記事がよく読まれていて、その影響力が大きいからです。新聞紙を通じてはもちろんです。インターネットのニュース、テレビのニュース紹介などでも新聞社の記事が多く使われています。そしてそれらのニュースはとても大きな影響力を持っているということを実感します。例えば、私の記事ではないですが、毎日新聞がスクープした「旧石器の発掘捏造問題」では、教科書の中身が変わるなど世の中に大きな衝撃が走る前代未聞の問題でした。このように、新聞記事が世の中を変えていくという現場に立ち合えるのは貴重な体験です。私は世の中を大きく変えるような記事をまだ書いていませんが、読者からの反響や記事の関係者から感謝を伝えられると、大きなやりがいを感じます。



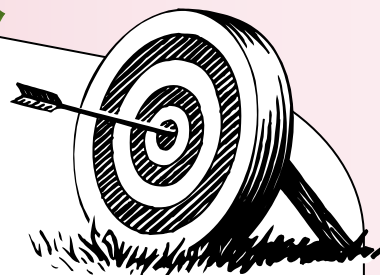
学生と社会人の違い

な

んと言っても責任感だと思います。いつまでにこれをやらなければならない、それも一定の品質を保たなければならない——。これは絶対に守らなければならないのです。「できませんでした」では済まされません。「できない」「やりたくない」は通りません。当然、「忙しかった」など、いろいろ言い訳はできるかも知れませんがそれは通用しない世界だと思います。私は入社して絶対に守っていることは、「期限を守る」ということです。私生活が犠牲になってしまったとしてもこれは貫いています。



いま役に立っていると感じる 高校時代の経験

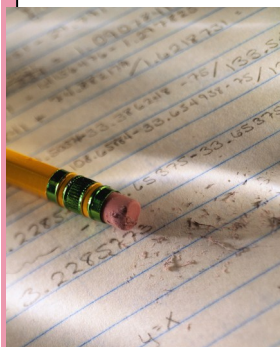


私

は弓道部に入っていましたが、部活での経験は今でも非常に生きています。試合に向けて毎日欠かさず何時間も練習をしていました。何かを毎日欠かさず続けるという忍耐力は、部活動が身につけてくれた事だと思います。

それから、ここ一番という時にパッと集中できるのも、部活動を通じて学んだことだと思っています。また、部活動は、自分たちで考えて部を運営するという伝統があります。言われたからやるのではなく、自主的に工夫して成果を出すことが求められました。このことは社会に出てからとても役に立っています。

学校生活では、吉田高校の先生方は非常に熱心に、授業以外でも個人的に指導してくれました。その中で先生と勉強以外の雑談をすることも多かったのですが、そういったときのコミュニケーションが、今の記者生活に生きています。人と話をする時、「どうすれば自分の言いたいことが伝わるか」「どうすれば相手から聞きたいことを聞き出せるか」「どうしたら好印象を持ってもらえるか」——といったことが重要ですが、先生方との会話から、そんな人生経験も積ませてもらえた感謝しています。



それから、毎日の小テストです。私は当時、「毎日毎日あって大変。なければ良いのに」とよく思っていたものです。しかし、今思い返せば、大学受験に役立つことはもちろんですが、将来の財産になると考えています。今、私は記事を書いています。慣用句や熟語と言った語彙の多さは武器になります。また、人と話をするときにも、一般常識として知っていなければ恥ずかしいことが、実は高校時代の小テストの知識だったりします。目先の事ばかりでなく、将来のことも考えて頑張ってください。

吉高生へのメッセージ



将

来の進路を考える上で、世の中にはどんな仕事があって、その仕事はどんなことに役に立っているのかなどを積極的に調べてみるのが大切です。私は高校時代、ただ漠然と「大学に行こう」と考え、世の中の仕事のことはあまり考えていませんでした。それは反省点です。考えてみてください。世の中にどんな仕事があるかいくつか言えますか。知っていそうで実はそんなにわからないのではないかと思います。国内だけでなく、海外も含めればもっと職種は多くなるかも知れません。今はインターネットで自由に海外の情報も得ることができますから、どんどん調べてみてください。仕事をすることで、それに向かって勉強しようというモチベーションがグンと上がると思います。大変なこともあるかと思いますが、頑張ってください。ご活躍を期待しています。

